

<幼稚園での一例:動物飼育活動活用教育の年間の流れ>

ねらい：子どもの園生活の中にその年齢・発達にあった動物を身近に飼って、保育士の支援のもと楽しませ世話に関わらせることで、心を安定させる  
 人間関係改善や促進・探究心・言葉などの発達への刺激となり、表現活動にも展開できるように期待する  
 支援システム：保護者の休日の世話と獣医師会との契約による助言・支援システム

	4～5月	6～7月中旬	7月下旬～8月	9～10月	11月初め	11月中旬～1月	2～3月
動物の状態	新しく世話する人になれていない	暑さと湿気に弱い	休日の世話不足で弱がち	食欲が増し太る	寒さに向かって、栄養をつける	寒さと正月休みのための、凍死・餓死を避ける	春休みに世話不足に注意
必要な動物への配慮	風囲いを4月半ばに取り去る	落葉樹の下など風通しの良い場所におく	あまりに暑い時や湿気の多い時は、冷房を考える	行事が多い季節だが、世話を忘れな(生命尊重)	風囲い・木製の巣箱,あるいはダンボール箱をいれる 休日の世話確認。	風囲い 巣箱 餌の充実 休日の世話	風囲いや巣箱を継続 休日の世話分担を準備しておく
<b>3歳児</b>  動物種	(ねらい)教師や安心できるお友達 物や場所に親しみ 安定して過ごす (内容)飼育小動物と出会う 安心して楽しむ(意図して親しませる) (効果)小さい生き物に対する心遣いの芽生え 自然への関心 動物の反応への探究心などの発達						
小鳥	(活動の一部) 世話の簡単なセキセイインコなどの小鳥を、ケージに入れて身近に置く 保育士と一緒に見る 保育士が小鳥の世話するとき一緒にお話しながら見ている 小鳥がさえずると、一緒に歌うなど、一緒に生活を楽しむ 自分でみつけたハコベやその他の草をつんでケージに差し入れて、食べるのを楽しむ 草にも関心が広がる 季節が寒いときやとても暑いときは、指導者を手伝ってケージを園舎の中に入れたり、暖かいときは外に出したりして、体への気遣いを子どもに見せる						
<b>4歳児</b>  動物種 モルモット	(ねらい)興味や関心を持ったことを取り入れながら、遊びを広げていく (内容)飼育小動物に興味をもってかかわり、親しむ (効果)愛情 友達との協力 探究心など 多岐にわたる発達が見られる						
活動	最初に関心と親しみを養うため(ふれあい教室)をする  教室の外(テラス)に飼う  やりたい子が先生と一緒に世話をする  先生と一緒に、部屋の中で抱っこする ランチ前には友達と一緒に片付ける	休み中は交代で、保護者と一緒に、家庭で世話をする  家庭での共同作業として、良い体験に	動物園への遠足 動物への知識や体験の広がり刺激する  絵や劇などの表現活動に動物や動物体験を活用する  日常の世話は、先生と一緒にいう	冬休みは家庭に預かって保護者と楽しむ	・5歳児の世話しているところを、一緒にみて来期の自分たちの飼育活動を知る  ・モルモットは、下級生に世話してもらうので、動物との別れを体験する		

	4～5月	6月下旬～7月	8～9月	10～11月初め	11月中旬～1月	2～3月
5歳児 動物種 鳥類 チャボ	(ねらい) 生活に見通しを持ち自分たちで進めていこうとする 自分達が庇わなければならない動物たち (内容)飼育動物の世話をし、生き物と深くかかわる (効果)愛情をもって接し、動物を良く観察できるようになり、言葉を持たない動物が喜ぶように工夫をするようになる 生き物への知識が増える 命への対応を覚える					
活動	(4歳児の終わりに上級生の世話をしている)	土日の世話・長期休業時は 交代で、保護者と一緒に登園して動物の世話を する	9月・観察が細かくなり様々な発見や疑問を見つけて気遣いをする 知識が増える (獣医師への質問会：病気の手当てと園児への説明 飼育指導、死亡時の死因の説明と埋葬支援など、園児の質問や要望に応える)	冬休みもすべて保護者と一緒に子どもが世話に関わる	卒園まで、いとおしんで世話を する	
チャボ	・ふれあい教室を受ける	家族の行事として案内し、楽しんでもらっている。	・ 劇、絵などに表現する。		卒園式	
	・グループ作りに動物が役立つ		・ 誕生会には、チャボの産んだ卵を料理に使って、みんなでお祝いする (自然の恵み)		今までの園生活や活動を振り返る言葉を述べる時、必ず飼育活動を入れる	
	・園児に先生の手伝いをさせて、世話の方法の確認をさせる  その後、生活グループごとに全員が世話をしていく					
留意点	○保護者に年度初めに飼育活動の教育的目的を説明し、支援（教育参加）をするように案内する。アレルギーなど困る点についても調査して対応を考える  愛情のある動物飼育体験は、子どもの成長に大きな効果を上げることについて、共通理解を得ておく 「大人の思惑を超えて、子どもは動物と心を直結させる」ことをふまえて、対応する。（子どもの心配にすぐに対応する）  自分の気持ちだけで、動物をおもちゃにしないように、小さいものへの気遣いを培うために、動物の気持ちや何を考えているかを、子どもと語りあう（お友達への気遣いに通じる） その子の反応に応じて、なでさせたり抱っこさせる 楽しい印象を大事にして、嫌がる子には無理強いせず楽しさを見せるにとどめる 「世話は、5歳児の2学期くらいで一人でもやれる」との誇りを持たせるのも良いが、幼児期は、「教師と一緒に飼育し、楽しむ」というスタンス無理をさせず、なにより動物への興味と愛情、弱いものを庇う気持ちを培うことを大事にする 動物への好奇心に答えていく(獣医師の活用) 子どもが動物を心配したとき、教師がそれをすぐにうけとる 専門的なことは獣医師に依頼して子どもの心配を収め、対応する 獣医師の専門的な知識と技術は子どもたちに、大人の一つのモデルを示すことができる 地域の獣医師と信頼関係を構築する 自動車は、常に動物の様子や反応を見ながら、命を守る態度を示す（子どもへの観察と対応する力にもつながる）					